

は基本的に重要である。ある雑草木を防除するのに最適な特定の生育段階がわかれば、最も有効に制御できるからである。

これまでのように習慣的にまた単純に刈り払うこと、除草剤を散布することから脱して、地ごしらえー下刈りー蔓切りー除伐という雑草木防除作業を一連のものとして体系づけて、科学的な雑草木管理法を確立していきたいもので

ある。このさい、林地雑草木防除法の体系化を単独に追究するだけでなく、森林のとり扱い方即ちその場で営まれようとしている林業の体系全体の中でこれを位置づけておくことが必要であり、それが最も有効で経済的な雑草木管理を達成するための方向であることを認識しておかねばならない。

除草剤と関係した頃②

バイオ・テクノロジー 第Ⅱ期： 前世界大戦の末期になり、ペニシリンの発見と製剤化がはじまり、吾国では敗戦後導入され、しだいに抗生物質の開発・活用がつづき、画期的な医療効果をあげた。農薬の領域でも、つづくようになってきた。

この時期に活潑化した一連の抗体源探索の手法は、同第Ⅳ期に連なっていた。

バイオ・テクノロジー 第Ⅲ期： 戦後やや遅れて、DDT・BNCその他の防除農薬導入につづき、吾国では画期的な農薬開発企業化が拡大進化した。同じ頃、昭和23～24年、2,4-Dの導入、所謂たのくさとり作業の解消を掲げて、除草剤の開発と効果研究・普及活動がつづいた。

バイオ・テクノロジー 第Ⅳ期： 現在クロームアップされてきた遺伝子組換え操作を主体とした場面が該当しよう。微生物から一般高等生物にわたる広範な領域におよび、さまざまな応用範囲も含まれてきた。医薬品などの新合成剤から、新種合成などの効果への期待が高まってきた。

一般に、バイテク時代といわれるのは、この第Ⅳ期に当るものだろう。

生物の生命科学にふれていくという喜びから

か、接触する関係者の人々は、いずれも従前にくらべて、イキイキとした感じを与えてくれるようだ。

はるかに、大きな成果を祈っておきたい。

Ⅱ 吾国でも農学以外の分野では、基礎学と技術学とを両立する方向に進んできている。

たとえば、船舶学→船舶工学、電気学→電気工学、化学→化学工学 などという風に。

2. 除草効果と増幅

新潟県農試在職中、除草剤（含生育調節剤）の吟味結果をきいたり、眺めたりする際、だいぶ以前とは違って、薬剤の性質・作用機作・適用立地・薬害・その他、とくに散布時期および使用量については適用巾などが植調のネットワークに設けられていたことと、残留性・魚毒性についても、慎重な配慮があったから、安心してみていられた。個人的な効果判断や個人的な採否判断にならない努力と姿勢を担当者群に希望していた。そのためか、独断的な判断は消えていった。

所謂適Ⅱテストの他に、新潟農試で適Ⅰテストを追加担当してからは、薬剤の合成傾向や検体の更新状況がよくわかり、採否などの展望に便利であった。（つづく）

（元新潟県農業試験場長 丸山 篤）